

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1 (博士学位論文) Other-Initiated Repair in Japanese: Accomplishing Mutual Understanding in Conversation	単著	2010年6月	神戸大学	会話の進行には、会話参加者がお互いの発話をその都度理解することが前提となる。聞き手が発話の聞き取りや理解をかんしてなんらかの問題を見出した時、その場で他者開始修復が発動される。本研究は、他者開始修復が会話参加者間の相互理解を促す仕組みを明らかにするために、会話分析の手法を用いて、以下の3つの問いに答える。(1)日本語会話において、他者開始修復がどのように組織化され、運用されているのか。(2)修復と日本語の文法的特徴との間になんらかのつながりがあるか。(3)修復の遂行に、会話参加者の知識状態が関与するのか。
2 (学術論文) 「より知る者」としての立場の確立—言い間違いの指摘とそれに対する抵抗—	単著	2010年3月	木村大治・中村美知夫・高梨克也(編) 『インタラクションの境界と接続—サル・人・会話研究から』 昭和堂, pp. 318-339	聞き返し(修復)は聞き取りや理解の問題を解決するために行われるものであるが、一方で、聞き返しによって、今話されている事柄について聞き手がどのような知識状態にあるのかか他者にも明らかになる。当該の事柄についてよく知っているからこそ聞き返す場合の典型が「言い間違いの指摘」である。本論文では、ある俳優の名前について言い間違いが指摘された会話事例を詳細に分析する。聞き返しに端を発する言い間違いの指摘と、会話参加者の間で行われる、どちらが「より熱心なファン」なのかをめぐる交渉とのかかわりを詳しく検討する。
3 (学術論文) An exploratory study for analyzing interactional processes of group discussion: The case of a focus group interview. 《筆頭論文》	共著	2009年3月	AI & Society, Vol. 23(2), pp. 233-249	話し合いを通して社会的意思決定に参画する機会の増加の一方で、効果的な話し合いの達成といった、話し合いのプロセスおよび評価に関する指標が明確ではない現状がある。本研究は、「よい話し合い」を検討する一つの方略として、一般の人々が特定の話し合いに対して抱く印象を、印象評定の手法で調査する。そして、話し合いの各シーンでの参加者のふるまいを微視的に観察し記述することで、第三者が抱く印象が話し合いのどのような側面から形成されているのかを考察する。 (共著者:Suzuki, K., Morimoto, I., Mizukami, E., Otsuka, H., and Isahara, H.)
4 (学術論文) 「なにかが欠けている発話」に対する他者開始修復—会話の事例から「文法項の省略」を再考する—	単著	2008年3月	『社会言語科学』第 10巻第2号, pp.70-82	日本語の特徴である「文法項の省略」について、従来の言語・文法研究では、その生起条件や省略されたものの復元アルゴリズムが主に取り沙汰されてきた。本論文は、会話の中で聞き手が、省略された(とみなされる)発話要素について確認や聞き返しを行っている事例を踏まえ、「文法項の省略」が実際には聞き手の理解を妨げる可能性があること、また一方で、特にそのような問題の解決を指向した手段が存在することを論じる。
5 (学術論文) 会話における数字の使用に関する一考察—「数字数量表現」と「主観的数量表現」が共存する事例をてがかりに—	単著	2007年3月	『津田葵教授退官記念論文集 言語と文化の展望』英宝社, pp.363-374	会話での「数字」が評価的に産出されたり理解されたりすることを、会話の実例を示しつつ論証する。特に数字による数量表現と、より大雑把な「主観的数量表現」が頻繁に共起することを指摘し、それぞれが果たす役割を検証する。